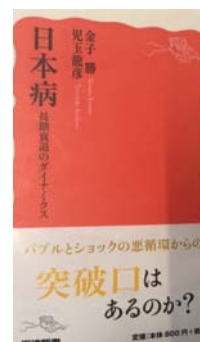


## 『日本病 長期衰退のダイナミクス』

金子勝・児玉龍彦両氏による岩波新書新刊である。本書帯に「格差と独裁」から多臓器不全に陥った日本社会を解明し、自然科学と社会科学の融合による「予測の科学」で治療法を提示とある。表紙カバー裏には、長期化する不況、失業者の増加、年金制度の破綻、少子高齢化の進行…。アベノミクスによって日本経済は「長期衰退」の時代に入り、いまや「日本病」とも呼べる状態に陥っている。『逆システム学』で市場や生命の複雑なしくみを解明した著者たちが、この「病気」のメカニズムとダイナミクスを明らかにし「治療法」を提示する。目次は第1章「日本病」と予測の科学 2「日本病」の症状-アベノミクスの失敗 3 抗生物資の効かない日本経済-バブルとショックの悪性化 4「主流派」の言説と実感のずれ-社会の破壊 5 エピゲノム病としての長期衰退 6 周期性のコントロールが消える時 7「日本病」からの出口はどこにあるのか



「乳がん治療からのセカンド・オピニオン」やエピゲノムの働きなど、示唆に富む指摘が多い。多くの付せんをつけたが、次の箇所だけ紹介したい。金融緩和という制御系の破壊によって、すぐ目に見える危害が起こるわけではない。しかし、外部環境の変化に対応する手段を喪失しているシステムは、様々なショックに影響を受け、停滞から衰退に進みやすい。異次元の金融緩和の害が、もちろん中国バブル崩壊のような、世界経済のショックのもたらす危害の振幅を大きくすることは間違いない。だが、それとともに深刻なのは、国内の「格差」の拡大と固定化である。異次元の金融緩和は、「円」の実質価値を目減りさせる。その結果、国民の資産、賃金は減少する。インフレターゲットと言いながら、実際には成長なき金融緩和は、多くの国民、多くの地域の、資産と収入を減少させ、貧困に追い込んでいく。その中で、「蜘蛛の糸」を切り捨てた大企業のみが強くなって生き残りをはかっていく。だが、その大企業も、国内経済の基盤が崩れるにつれ、かつては世界に誇った科学技術や人的資質も低下し、グローバル化により特徴を失い、「グローバル企業」という名の根無し草となり、成長してくる新興国との競争にあけくれ、儲け先を求めてさまようことになる。「日本衰退」の道である。

「日本病」に直面するわれわれには、経済の個々の制御メカニズムを立て直しながら、新たな産業と雇用を創出し、経済の制御系を制御するメカニズムであったはずの財政・金融政策を立て直すことが待った無しの課題となっている。同時に、それは栄養と増殖の組み合わせのエピゲノムのように、格差と貧困を克服し国民の生活と健康を守る社会保障・福祉・年金・雇用制度と統合的に設計されなくてはうまく働かないであろう。

(2016年2月13日)